

授業時 子供たちのために叱る

「友達の絵」の課題に、皆真剣に取り組んでいた。図工専科のP教諭は、「最近、学級が落ち着かないと担任から聞いていたが、それほどでもない。」と安心して個別指導を始めた。そのときだった。

「何をするんだよ、返せよー。」『なあんだ。これが顔かよ。』『返せよ。』『おーい。みんな見てみろよ。』という騒々しい声が上がった。

見ると、Qさんがいすの上に立って画用紙を見せびらかしているそばで、Rさんがそれを取り返そうと飛びついている。あたりはこぼれた筆洗いの水で水浸し。

P教諭は、「やめなさい。すぐに絵を返すんだ。」と厳しくQさんにせまった。いつもは穏やかなP教諭の強い語気に、騒然としていた教室内は一瞬静まり返った。

「いきさつはともかく、みんなの大事な授業を壊してはいけない。君にとっても大切な時間なんだよ。

さあ、こぼした水を拭いて…。」

P教諭はQさんに雑きんをわたし、自分も一緒に床を拭き始めた。遠巻きにしていた子供たちも、手に手に雑きんを持って集まってきた。



他の子供の学習のじゃまをするなど、授業を妨害する子供に対しては、きちんと叱る必要があります。

叱るべきは叱る

「見逃されることは、見捨てられることと同じ。」という、子供の声があります。子供も「叱るべきは叱る」姿勢を求めているのです。

授業は、生活指導の大切な場です。生き生きと自己表現ができる雰囲気大切にしながらも、他人に迷惑をかける言動は見逃さず、きちんと指導しなければなりません。はじめのある授業の中でこそ、一人一人の能力が発揮され、個性を伸ばすことができます。

自分の非に気付かせる叱り方を

しかし、叱り方によっては、反省を促すどころか、かえって反発を招いてしまうことがあります。①見せしめ的に叱る ②思いこみや先入観をもって叱る ③過去のことも併せて叱る ④他の人と比較しながら叱る ⑤その日の気分によって叱るなどは、避けなければなりません。

特に、「だからお前はだめな人間なんだ」「しつけがなってない」など、人格を傷つけるような叱り方はやめ、行為の「非」をきちんと指摘し、自らの非に気付かせるようにすることが大切です。

罰を与えるのではなく、なぜ叱られたのかを考えさせ責任をとらせる

過ちに気付いたら、不利益を与えたことに対して責任をとることを教えることも大切です。事例でも、Qさんに自らの責任を果たさせています。こうした積み重ねを経験する中で、善悪を判断する力、思いやりの心、責任ある態度などが育っていくものと思われます。